ＪＡＳＲＡＣ８０周年記念式典発表
「つなごう未来へ、世界へ。８０年目の変革宣言」

はじめに

ＪＡＳＲＡＣは、今年、創立８０周年を迎えました。
これを機に、２０年後にあたる１００周年、さらにその後の５０年、１００年を展望し、広く皆さまにＪＡＳＲＡＣの思いと、これからの歩みをお話ししたいと思います。

ＪＡＳＲＡＣが１９３９年１１月１８日の創立から８０年を経て、ここまで成長できましたのは、我々の努力によるものだけではありません。
それは、国民の皆さまが多様な音楽を、様々な楽しみ方で愛していただいていること、音楽を利用される皆さま、関係団体の皆さまに長きにわたる御理解と御協力をいただいていること、そして、創作者の皆さまが素晴らしい音楽作品を作り続け、音楽に関わる多くの方がその素晴らしい作品を世に届けてきたこと、それらがあってこそのものです。さらには、欧米諸国の先進団体から支援を受けて集中管理の基盤が構築できたことも大きな要因です。
ＩＦＰＩ国際レコード連盟によれば、２０１８年の日本の音楽市場は、アメリカに次いで世界第２位でしたが、すでにわが国の人口は減少へと向かっており、経済はやがて収縮の時代を迎えることが想定されます。
一方で、日本の音楽市場はグローバル化が進み、世界へと広がっています。これからも「音楽著作権の保護と音楽著作物の利用の円滑とを図ることによる文化芸術の普及発展」というＪＡＳＲＡＣの究極的な目的を果たし続けるためには、世界の音楽市場を視野に入れた事業展開が必要です。
ＪＡＳＲＡＣは、日本の音楽市場の発展のために、これまで注力してきた著作権管理事業を充実させることに加え、今後大きな成長の余地があるアジアにおいて、健全な音楽市場が形成され、その市場が発展していくよう、アジア地域の著作権管理団体への支援が必要であると考えています。

ＪＡＳＲＡＣの変革

ＪＡＳＲＡＣは、権利者の方々の視点、利用者の方々の視点に加え、広く皆さまの視点をより重視し、文化芸術の普及発展に資する取組に力を注いでいきます。ＪＡＳＲＡＣは、「著作権管理事業」というこれまで音楽創作のサイクルを支えてきたエンジンに加えて、「委託者共通の目的にかなう事業」という２つめのエンジンを備える組織に変わり、新たな事業を開始します。

従来のエンジンで、創造のサイクルをさらに育てる

著作権管理事業では、２０２３年度の完了を見据えて、「デジタルトランスフォーメーション」と「組織人事の見直し」を進め、委託者の方々への付加価値の向上、委託者・利用者の皆さまへのサービス・満足度の向上、そして、そのための透明性の確保と経費削減を実現します。

権利者の方々に向けた変革として、委託者の方々への使用料の分配を、これまで以上に増加させる取組を強化するとともに、委託者ご自身の音楽作品の管理状況が、より分かりやすくなるシステムを整えます。加えて、現在の演奏権、複製権、インタラクティブ配信や放送にかかわる著作権管理事業の手数料を３年間かけて抜本的に見直し、２０２２年に、新管理手数料率を完成させます。このほか、すでに進めているデータベースの整備や分配明細書の精緻化などの取組を充実させます。さらに、ライブハウスや飲食店などにおける演奏に対して支払われた使用料の分配を、サンプリング調査による分配方式から、使用された全ての音楽作品の報告を元に分配比率を決める、全曲分配方式への移行を進めます。そして、利用内容などの詳細な情報も、委託者の方々にお届けします。

一方、音楽を利用される方々に向けた変革としては、音楽利用の手続きの利便性向上を今まで以上に実現させていきます。さらに、お支払いいただいた使用料が、きちんと権利者に届いていることを、利用者の皆さまにも実感いただけるような仕組みを整えます。このように、利用者の方々の満足度を高めるための取組も進めます。

これらの著作権管理事業の変革においては、ブロックチェーンやＡＩなどの先進技術の活用が欠かせません。ＪＡＳＲＡＣは、様々な先進技術の実用化に向けて検証を進めています。

また、創造のサイクルを潤す鍵は、著作権の理解が浸透することにあります。著作権制度設立の趣旨である「著作権法は、著作者等の権利の保護を第一義的な目的とする」という考え方に通じた研究者・法律家を増やすなど、著作権研究者の育成も急務と考えています。

歴史を遡れば、１８４７年、フランスはパリ、シャンゼリゼのカフェ「アンバサドール」で、作詞家・作曲家自らが、自分の楽曲が、ことわりもなく演奏されていることに対し、「演奏の対価を支払わなければ飲食代を支払わない」と店主に申し立て、創作者が裁判を起こし勝訴しました。彼らは、その後、世界最古の音楽著作権管理団体ＳＡＣＥＭを立ち上げます。これらの作家の行動は、演奏権管理の原点といえるものでした。音楽利用の把握、音楽利用状況の調査、利用主体の特定、利用主体との交渉、さらに、交渉がまとまらない場合の司法救済、その後の楽曲利用に係る対価の収受など、現代、そして将来に亘り続く、著作権管理団体の基本的な手続きが体現されています。

ＪＡＳＲＡＣは、先人に学び、著作権管理団体の存在意義ともいえる演奏権管理を、これまでと変わらず充実させていきます。

ＪＡＳＲＡＣは、従来の取組の充実に加えて、新たな挑戦をし続けることが、著作者の方々と利用者の皆さまとを円滑につなぐ「創造のサイクル」をさらに大きく育てていけるものと考えています。常に新しい音楽が生まれてくる環境を作り、音楽市場の多様性を維持することも重要な使命と考え、新たな事業展開に反映させていく所存です。

新たなエンジンを加え、文化芸術を発展させる

８０周年を機に「委託者共通の目的にかなう事業」、という新たなエンジンを加えます。それは、文化芸術を発展させるための新たな取組です。

委託者共通の目的とは、音楽著作権の保護と音楽著作物の利用の円滑を図ることによる文化芸術の普及と発展であり、ＪＡＳＲＡＣの究極の目的であります。

具体的にどのような事業を行うかは、まだ決まっておりません。実施する事業は、決定プロセスに公正性・透明性が求められるため、外部有識者で構成される委員会において検討することとしています。したがいまして、どのような事業を行っていくか、ということは現時点では申し上げられないのですが、冒頭申し上げました、ＪＡＳＲＡＣに今後求められる役割という観点から、いくつか事業例を挙げるとすれば、例えば、著作権思想の普及を図ることで、広く国民に音楽著作権の保護についての理解を求めていくことや、アジアの団体への支援が考えられます。アジアでは、かつて日本がそうであったように、集中管理制度の発展が必要です。

ＪＡＳＲＡＣの国際交流は、１９５１年にＡＳＣＡＰからアメリカの音楽の管理を委託されたことに始まり、それから３年の間に欧米各国の団体から管理を委託されることで広がりをみせました。その後、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカといった欧米の先進団体がＪＡＳＲＡＣ職員に行った研修などが、ＪＡＳＲＡＣの管理基盤作りに貢献したのです。かつて欧米諸国の支援によってＪＡＳＲＡＣの管理基盤が培われた恩返しとして、今、ＪＡＳＲＡＣがアジアの団体に支援を行うことも検討していくべきであると考えています。

揺るぎない理念を基に

時代、社会の変化とともに、ＪＡＳＲＡＣは挑戦していきます。しかし、変わることのない大切な考え方があります。

日本音楽著作権協会の英訳は、「Japanese Society for Rights of Authors、Composers and Publishers」です。これは、作詞者 Author、作曲者 Composer、音楽出版者 Publisher といった権利者の権利 Rights を守るための組織ということを表しています。

ＪＡＳＲＡＣの基本理念である音楽著作権の保護は、著作権を、人権のひとつとする理念に基づいており、これは今後も変わるものではありません。著作権を人権としてとらえる欧州の思想は、１８５１年にフランスのＳＡＣＥＭが設立される以前からの考え方です。

「つなごう未来へ、世界へ。８０年目の変革宣言」

ＪＡＳＲＡＣは、創立８０周年を迎えました。

ＪＡＳＲＡＣは、８０周年を機に、決意新たに、より音楽文化の発展に寄与する組織に生まれ変わります。これまでの「著作権管理事業」というエンジンにおいては、著作者の方々と利用される皆さまを円滑につなぐ「創造のサイクル」を、さらに大きく育てます。そして、新たに「委託者共通の目的にかなう事業」というエンジンを加え、ＪＡＳＲＡＣの究極の目的である文化芸術の普及と発展のために、新たな事業を展開します。

新たな事業展開をしても、「著作権を人権のひとつ」ととらえ、著作者の権利を守ることは、人権を守ることである、という、変わることのない理念を大切に守っていきます。

８０周年は、いわばあくまでひとつの通過点に過ぎません。

この先の１０年、５０年、１００年後の未来へ向かって、そして世界へ向けて、音楽をつないでいくために、８０周年を機に、変革を宣言いたしました。

「つなごう未来へ、世界へ。８０年目の変革宣言」。

今後とも、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。